

Inform の他動詞用法
—「SVO to do」構文を巡って—

竹中裕貴

0. *Inform* の他動詞構文における問題

基本的な動詞の用法を問う TOEIC 形式の問題で *Beyond the Basics of the TOEIC TEST* という教科書に、空所に入る適切な語を選ばせる問題が出題されている（以下、用例中の下線部はすべて筆者によるものである）。

- (1) After taking three months of training, new employees are ----- to start work on September 1.
(a) scheduled (b) composed (c) informed (d) engaged

正答は (a) の *scheduled* であり、下線部は「新入社員は9月1に仕事をはじめの予定になっている」という意味で文を解釈することになる。紛らわしい選択肢としては、(c) の *informed* があり、to 不定詞を後続させることで「9月1に仕事をはじめよう言われている」という解釈が与えられるのではないかと推測が働く。確かに、他の伝達動詞 (reporting verb) を考えた場合、例えば *tell* は (2) のように、「SVO to do」構文をとることができるため、解答者には、この受動態として「S be V-ed to do」の形が類推され、混乱を招く可能性がある。

- (2) [SVO to do / SVO that 節] 〈人などが〉 O 〈人〉に…しなさいと言う、命じる
— 『ジーニアス英和 5』, s.v. *tell*

しかしながら、*inform* 自体には、「～するように言う」のような意味はなく、このような用法は辞書に記載されていないため、一般的には不適切であると考えられる。さらに言うなら、「SVO to do」構文は、基本的に S が O に働きかけて to do を実現するように仕向けることを表すため、V には、[+imposition] という意味的要素が必要となるが、*inform* には「情報を知らせる」という意味はあるものの、to 不定詞を導くための指示的な意味合いはないため、そもそもこの構文には馴染まないということであろう。

さて、以上のように議論を終えても良いところであるが、より記述的な観点から、辞書には現れない *inform* の「SVO to do」の構文が使用されていないか調査してみると、(3) のような用例が簡単に見つかる。以下の *The Washington Post* の社説からの一例を見られたい。

- (3) DONORS WHOSE addresses turn out to be tenements. Dishwashers and waiters who write \$1,000 checks. Immigrants who ante up because they have been instructed to by powerful neighborhood associations, or, as one said, “They informed us to go, so I went.” (<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2007/10/21/AR2007102101069.html>)

これは、選挙権の有無や支持者の経済状況の如何を問わず様々な形で政治資金集めをしているとされた Hilary Clinton を批判した記事の一部であるが、下線部は記事の筆者が移民の発言を引用したものである。動詞 *inform* が目的語に人称代名詞 *us* をとり、その後、*to* 不定詞が後続している。

これはどのように解釈すべきだろうか。文脈から判断すると、そこで表される意味は、単に「情報を知らせる」というものではなく、*tell* の用法として (2) で見たように「～するように言う」という意味で解釈され、「彼ら（近所の住民）が（ヒラリー・クリントンに寄付をしに）行けというので、行きました」とするのが妥当であるように思われる。確かにこの解釈が可能であれば、*inform* の「SVO to do」構文の用法を認めることとなる。はたして、(3) を非文とし、無視してしまってよいのであろうか。

そこで本稿では、*inform* が伝達内容により相手に何らかの行動を促す場合、*tell* のように「SVO to do」構文で用いられていることを、アメリカ英語に絞り、くつかの具体例を通して検証していきたい。

以下では、まず、*inform* の既存の用法を簡潔にまとめた後、「SVO to do」構文そのものについて分析することで、この構文自体がどのようなプロセスで形成されているのかを明らかにする。その上で、*inform O to do* や *be informed to do* のような形で用いられる実例をいくつか挙げ、記述すべき重要な *inform* の構文として議論する。また、最後に、本稿の分析におけるいくつかの問題点も指摘し、今後の研究の課題を提示しておきたい。

1. *Inform* の基本的な用法

まず、今一度、辞書の記述を確認してみる。『ジーニアス英和 5』(s.v. *inform*) をまとめると、他動詞としての *inform* には (4a, b, c) の3つの構文が見られる。

- (4) a. [SVO] 〈人・通知などが〉〈人〉に（口頭・書面で）知らせる、通告する (*tell*)
b. [SVO1 of [about, on] O2] 〈人などが〉O1 〈人〉に O2 〈ニュースなど〉を通知する
c. [SVO that 節 / SVO wh 節・句] 〈人〉に…と […かを] 告げる

やはり SVO to do という形は見られない。また次に、英英辞典も確認しておく。OALD(s.v. **inform**) には、自動詞用法と他動詞用法を合わせて、(5a-d) の 5 つにカテゴリ分けされてまとめられている。

(5) to tell sb about sth, especially in an official way

- a. ~sb (of/ about sth)
- b. ~sb that...
- c. ~sb + speech
- d. ~sb when, where, etc...

この他、OED やその他の辞書を調査しても、やはり「SVO to do」という形での記述はない。Inform はしたがって (6) のように、特定の情報を公式的に伝える場合に使用され、目的語として人を従え、後に伝達内容として、前置詞句、that 節や wh-節、または被伝達節 (reported clause) が続くことが分かる。¹⁾

(6) inform O (人) $\left\{ \begin{array}{l} \text{句} \Rightarrow \text{前置詞句 (of / about / as to) \cdot wh-句} \\ \text{節} \Rightarrow \text{that \cdot wh-節} \\ \text{被伝達節 (直接話法)} \end{array} \right.$

このような辞書の記述のみを踏まえるなら、やはり *inform* には、「～するように言う」といった意味での「SVO to do」構文は存在しないことになる。

2. 被伝達節と to 不定詞への書き換え

では次に、構文という視点から *inform O to do* という特殊用法について議論してみたい。辞書の記述にはない (3) の用例を認め、“informed me to go” に「私に行けと言った」という解釈を与えることが可能になる場合には、当然、コンテキストからの推測もあるのだが、*inform* のみならず、「SVO to do」という構文形式が大きく影響していると考えられる。

直接話法の伝達部に命令文が用いられた場合、それを間接話法に書き換える際には、その命令文が表す発話内容によって、伝達動詞にはそれぞれの発話行為を明示する動詞が選ばれ、「SVO to do」の構文形式が用いられる。具体的には、次のような書き換えの例がある (安藤 2007: 715)。

(7) a. He said to me, “Go at once.”
 b. ⇒ He told me **to go** at once.

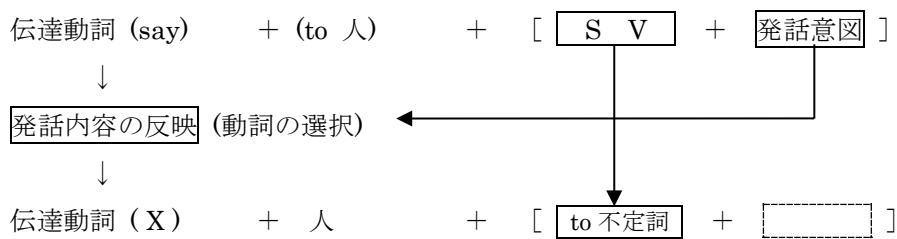
a. He said to me, “Please send for the doctor.” <依頼>
 b. ⇒ He **asked** me to send for the doctor.

- a. The doctor said to him, “Don’t smoke too much.” <助言>
 b. ⇒ The doctor advised him **not to smoke** too much.

- a. “Do have a cup of coffee.” she said to me. <誘い>
 b. ⇒ She **urged me to have** a cup of coffee.

上記のプロセスを簡潔にまとめると、まず、「SVO to do」への書き換えの第一歩は、各用例の下線部、すなわち被伝達文の発話内容を適切に読み取ることである。そして、その発話内容を反映できる伝達動詞を選択するのである。最後に、その発話行為によって求められる行動を、to不定詞によって簡潔に表現することになる。このことは、以下(8)のようにまとめることができる。

(8)



今一度、(3) の例，“They informed us to go, so I went.” を考えると、「SVO to do」構文の基底にある伝達節は、直説法では (9a)、間接法まで考えれば (9b) のように再構築することができる。

- (9) a. They said to me, “Go.” so I went.
 b. They told me [said to me] that I had to go, so I went.

ここにおける下線部の被伝達文の発話内容は「命令」であり、伝達動詞 (X) は、本来ならば *tell* が現れるのが自然であるが、(3) においては *inform* によって代用されている。確かに「SVO to do」構文を担えないとされている *inform* ではあるが、(10) のように命令の意図を持った伝達節をもともと従えることができることも、(3) のような言い回しが生まれる重要な背景となっていることは間違いないだろう。

- (10) a. They informed me, “Go.”²⁾
 b. They informed me that I had to go.

いかに辞書的には認められていなくとも、上記のようなプロセスにおいて *inform* が *tell* と意味と用法が隣接した動詞として一般に受け止められていたとしても不思議ではない。二つの動詞の類似性については、Huddleston and Pullum (2002: 131) に従えば、‘verbs of communication’ として次のような記述が見られる。

(11) Verbs of communication

The verbs most commonly used in this way are: *say, tell, inform* (these latter two typically with a 1st person indirect object, or else in the passive with a 1st person object, as in I’m told you’re off to Paris tomorrow), ...

また、特に聞き手にとっては、「SVO to do」構文により想起される命令的な発話の意味からも、(3) のような表現を過去に聞いたことがあろうと無かろうと、話者の意図した意味 [(10a, b)] を理解可能となるし、違和感もないのであろう。

最後に、「SVO to do」構文について、Quirk et al. (1985) が詳細に検討した、‘ditransitive complementation’ (pp. 1208-1216) に関わる (12) の記述を見られたい。

(12) Indirect object + to-infinitive clause object

I *told / advised / persuaded* Mary to see a doctor.

これまでの議論を考慮すれば、典型的な ‘indirect statement’ を表現する *inform* が、*tell* もその例として上がっている構文 (12) の中へ、すなわち ‘indirect directive’ の領域へ侵入したとしても無理はない。Burchfield (2004) は、“idiomatic” ではないだろうとし、否定的な立場ながらも (12) のように、*inform O to do* の統語構造に触れていることも興味深い：

(13) **inform** is a formal equivalent of *tell* and is in fairly restricted use: e.g. *the detective informed him of his rights; a station announcement informed us that the next train would arrive in ten minutes*. A customer, taxi, visitor, etc., might be *asked* or *told* to wait; it would not be idiomatic to say, for example, *Please inform Mr Jones to wait outside for five minutes*.

では次に、実際に「SVO to do」という形で *inform* が用いられている例をいくつか提示し、この用法がアメリカ英語において、一般に浸透していることを実際に確認したい。

3. 具体例を探る

今回の調査では、「SVO to do」構文は、「S be V-ed to do」と受け身に変形されて用いられるものも多く見受けられた。主にアメリカのニュースを扱うメディアを中心に、非常に多くの用例が発見できたが、本稿では、その一部を以下に挙げておきたい。

CBC News は、*The Wall Street Journal* (<http://www.wsj.com/articles/SB10001424052748704164004575548403514060736>) を引用し、コーヒーの質が落ちていると批判されたスターバックスが従業員に、スチームミルクをまとめてではなく、飲み物ごとに作るよう対策を講じることを指示していることを報じた。ここでもその指示を *inform* を用いて表現しているが使用されている。

- (14) Employees are now being informed to steam milk for each drink instead of steaming an entire pitcher for several beverages. Other changes include rinsing pitchers after each use and using only one espresso machine instead of two.

(<http://www.cbc.ca/news2/pointofview/2010/10/starbucks-do-you-prefer-speed-or-quality.html>)

The Wall Street Journal の記事には、2009年、“swine flu”とも呼ばれたインフルエンザウイルス H1N1 が流行した折、体調が悪くなり、感染の有無をチェックするため助けを求めて 311 に電話をしたアメリカ人記者が、たらい回しをされているような状況に陥ったという経験が描かれているが、電話をかけると指示されたという文脈で、*tell* と *inform* の両方を交互に使用しているのは興味深い。

- (15) The 311 operator told me to call the New York's State Health Department hotline, where I was informed to call my family doctor.

(<http://www.wsj.com/articles/SB124138858052581321>)

The Network という情報セキュリティなどの指導を行っている会社のホームページには、しっかりとセキュリティ意識を持つために、パソコンから離れる際にはロックをかけると指示されたという社員が以下のように記述している。

- (16) After I started working at The Network, I was informed to always lock my computer when I leave my desk.

(<https://www.tnwinc.com/9266/4-cases-security-awareness-training-saved-day/>)

CNN Presents では、“Mystery of the Arctic Rose”と題した特集が放送された。シアトルに拠点をおいていた Arctic Rose という漁船の沈没で、15人の乗組員の命が失われた。事件を目撃

した沿岸警備隊員の証言は以下のものであった。救助を指示するという文脈で、*inform* が使用されているのが分かる。

- (17) They were trying to rescue him, but the sea state was very difficult to deal with. We informed them to try to rescue as best they can, but do not put any of their crew members in danger. (<http://edition.cnn.com/TRANSCRIPTS/0203/31/cp.00.html>)

また、さらに個人レベルの発信では、*New York Times* で掲載されているブログにおいて、“The Voices of Rare Diseases” と題した難病を扱った記事の投稿欄には、以下のような医療不信のコメントが残されていた。無駄な検査の後、ER へ行くよう指示されたという投稿者は、そこで *inform* を用いている。

- (18) i finally found i [sic] doctor with a good track record, and after two pushes on her lower back and stomach... he stop the exam and informed me to get her to the E.R.... it turns out after 10,400 dollars of testing that it was no longer in her bladder and was moving threw her kidney's witch is very serious!!!
(http://well.blogs.nytimes.com/2011/01/19/voices-of-rare-diseases/comment-page-2/?_r=0)

以上、動詞 *inform* が *tell* の代用として使用され、「SVO to do」構文で実際に用いられている例をいくつか見てきた。提示した用例の数は限定的であるが、しかしながら無視できるデータではない。

ただし、注意されたいのは、アメリカ英語を母国語とする者への筆者の簡単なインフォーマント調査によれば、上記の用例をまったく問題のない表現であるとするネイティブスピーカーがいる一方で、違和感を覚える者、または、規範的 (*prescriptive*) な立場からは容認できないが、格式張らない話し言葉では使用を認める者など、その反応は分かれるところであったという点である。また、特に受け身文では、その構文自体に客観性が感じられるのは確かであろうが、*tell* と *inform* が、「SVO to do」または「S be V-ed to do」構文において、ほぼ同義と感じられる者と、情報伝達のプロセスに“in an official way”という意味が生きていると感じる者とがおり、より幅広いコンテキストを勘案した形で継続的な資料収集と調査を行っていく必要がある。

いずれにしても、*inform* の「SVO to do」という統語構造は確実に存在しているようである。そして同時に、少なくともアメリカ英語の言語変化の潮流に乗っている一方で、完全に定着した表現ではないこともまた考慮しておかなくてはならないだろう。

5. 結論

以上、本稿では、辞書には現れない *inform* の「SVO to do」構文について概観してきた。上述の通り、これはアメリカ英語に起こっている言語変化の一環であり、そしてその変化は、*inform* の表す発話行為の変化によるものであった。すなわち、情報伝達に関する陳述行為が、情報伝達による指示行為へと変化した結果、「～するよう言う」という意味で解釈可能になっているのである。

しかしながら、本稿における議論は、この *inform* の構文の問題の一端を明らかにし、問題を提起したに過ぎない。特に本論では、動詞 *inform* と *tell* のみに集中したが、その他の伝達動詞で、「SVO to do」の統語構造で使用できる、例えば *notify* との比較や、逆に、この構文では使用できない伝達動詞に、*inform* と同じような言語変化が起こっているのか、もしそうであるなら、それはなぜかという問題についてより幅広い調査を行わなければならない。

また、こうした発話行為が生じる背景として、この構文が用いられる場合の話し手と聞き手の関係をはじめ、社会的な背景も考慮する必要がある。筆者のインフォーマント調査でさえ、*inform* の「SVO to do」構文に対する認識に差が認められたのは、英語話者と関連する多様な社会言語学的要因も大きく影響していると思われるからである。さらには、言語変化の 1 つの基板となる社会言語学的な要因が、動詞の本質的な部分にどのような変化をもたらすのかという側面も、非常に興味深い課題である。

今後も、これらの問題について調査を継続していきたい。

【注】

- 1) 前置詞 *of* や *about* については、その代わりに *as to* が現れることもある。
Can you *inform* me (as to) where he lives? [安藤・山田 (1995), p.290]
- 2) 書き換えを分かりやすくするため、*inform* の直後に機械的に直接話法を使用した結果、被伝達節が“Go”のみとなっているため分かりにくい文章となっている。念のため、*inform* が直接話法をとる別の例を以下に挙げておく。
‘That’s nothing new,’ she informed him. – ODE3, s.v. **inform**

参 考 文 献

[辞書・論文・研究書]

Oxford Advanced Learner’s Dictionary of Current English. 8th ed. Oxford: Oxford University Press. 2010. [OALD8]

Oxford Dictionary of English. 3rd ed. (Revised). Oxford: Oxford University Press. 2010.

[*ODE3*]

『ジーニアス英和辞典』第5版. 研究社. 2013. (『ジーニアス英和5』)

『リーダーズ英和辞典』第3版. 研究社. 2013. (『リーダーズ英和3』)

Burchfield, R.W. (2004), *Fowler's Modern English Usage*. First edited by Henry Watson Fowler. Revised with title change. Oxford: Oxford University Press.

Huddleston, R. and G.K. Pullum (2002), *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.

安藤貞雄 (2007), 『現代英文法講義』 開拓社.

安藤貞雄・山田政美 (1995), 『現代英米語用法辞典』 研究社.

[インターネット資料]

CBC News <http://www.cbc.ca/news2/pointofview/2010/10/starbucks-do-you-prefer-speed-or-quality.html>

CNN <http://edition.cnn.com/TRANSCRIPTS/0203/31/cp.00.html>

The Network <https://www.tnwinc.com/9266/4-cases-security-awareness-training-saved-day/>

The New York Times http://well.blogs.nytimes.com/2011/01/19/voices-of-rare-diseases/comment-page-2/?_r=0

The Washington Post <http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2007/10/21/AR2007102101069.html>

The Wall Street Journal <http://www.wsj.com/articles/SB10001424052748704164004575548403514060736>

<http://www.wsj.com/articles/SB124138858052581321>

(たけなか ゆうき・島根大学外国語教育センター准教授)

